

らいおん



今日も雨が降っていた。4月に入ってずっと雨が続き、しばらく冬が戻ったような寒さだった。しかし、午後になると雨は小降りになり、太陽もひっそり雲から顔をだし、そのうち雨もやみ、春の暖かさになった。

天気予報はずれた～

洋子はよかったと思う反面、傘もってきちゃって荷物にもなるし、店に入るとすぐ傘を置き忘れてしまいがちだから、必要以外には傘を持ち歩きたくなかった。また、崇のことを思い出すから。

約2年前、まるで今日みたいな、突然空が曇り空の雨だったのに午後2時すぎぐらいに雨はピタッとやんでいたことがあった。崇とちょっと遅いお花見で食べるつもりだった、洋子手作りのお弁当を、雨がざんざんに降っていたので、外で食べるはずだったが、しょうがなくショッピングモールのフードコートの席に座り、フードコート内に入っているお店のジュースを買いつつ、持参のお弁当を一目を気にしながらこそこそ食べた。

日曜日で家族連れやカップルなどやたら人が多かったので、席について、しかもジュースだけで席につくのも悪い気がし、また持ち込みの物を席について食べてはいけない規則があったような気がしたので、二人は一目散にかけ込むように食べ、フードコートから出た。

「やっぱ美味しかった卵焼き！洋子ちゃんの卵焼き、なんか一番好きだな。オレ。」

洋子が早朝から時間をかけてつくったお弁当を約5分で食べて出てきてしまったので、崇は何か気の毒に感じ、洋子に元気よくそういった。

「ありがとう。でも人沢山だったね、フードコート。日曜だったからね。

すっごく食べにくかったよね。となりのおばちゃん、私のお弁当じろじろみてたし。」

「食べる所、雨ざーざーだし、ここしか思いつかなかったし、しょうがないよ。マックとかそういうのダメだし。学生のころ弁当友達と食べて、ポテトとジュースも食べてたけど見事に注意された」

「マックもダメならフードコートも本当はダメだったけどね。．．．もう～！今日晴れるって天気予報でいったのに！」

洋子はいらつきながら言った。そして丁度ショッピングモールの出入り口の大きなガラスドアの近くにきていた。ドアの向こうから外が明るくなっているのがみえた。

「え？今晴れてるの？」洋子は驚いた。

「そうみたい。．．」崇はぽかんとしながらいい、ポケットにあるiphoneのバイブに気がついた。

洋子は「ああっ！傘がない！」と大きい声で崇にいったが、崇はすでに自分のiphone にでていた。

洋子は崇が電話にでてるにも気にせず、「フードコートに置いてきちゃったんだ。ちょっととりにいってくるね！」と崇にしゃべり続け、すぐにエスカレーターの方にむかった。

崇と一緒に座っていたテーブルに戻ってきたが、傘は見当たらない。

「おかしいな。。店員さんが保管してるのかしら。それとも盗まれた？」

と洋子は考えてながら、ぐるーっと周辺を見渡し、またすぐ横もみた。

すると隣の席の中年の女性が、派手な色のブックカバーをつけた本を読みながら洋子のほうをジロジロみて、すぐ読んでいる本に目を移した。

「さっきの **じろじろおばさん** 」と、洋子は先程二人でお弁当をかきこみながら食べているときにじろじろお弁当をみていたおばさんが、まだ自分をみているのに気がついた。洋子は何か感じが悪いなあと思い、そんなにお弁当持参で食べてたのが気に入らなかつたのか、なんなんだろう？とちょっとムツときたので、今度は洋子からおばさんのほうをみると、なんと洋子の傘を自分のテーブルの脇にかけていたのだ。

「あつま（頭）きた！」なんで自分の大切にしているちょっと高級の傘を数分置き放しにしたぐらいで、おばさんがまるで自分のもののように自分のテーブルの脇におくのか？これで洋子は **じろじろおばさん** に、一体なんでそんなに自分をジロジロみるのかも、堂々と聞き出せると思い、とりあえずその中年女性をじいーつとにらんだ。そうすると

「あなた、ピアノ好き？」といきなり **じろじろ** は洋子に意外な質問を投げてきた。

『へっ？』洋子は拍子ぬけた。しかし、直ぐに我にかえり、

「ピアノはいつでもいいですけど、その傘、私のなんですけど。それに. . .」

「はい、よかったら聞きにきてね。私こう見えてもピアノ奏者なのよ」と **じろじろ** はいいながら、ポストカードを2枚洋子に手渡した。そのポストカードには”上原みどりピアノライトリサイタル”と書いてあるのがみえた。